SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

十一人の賊軍

2024 年／日本映画
配給：東映／155 分

2024（令和 6）年 11 月 2 日鑑賞	T・ジョイ梅田

Data　２０２４－７５

監督：白石和彌
脚本：池上純哉
原案：笠原和夫
製作：紀伊宗之、高橋大典
出演：山田孝之／仲野太賀／尾上右近／蛸師里保／佐久本宝／千原せいじ／岡山天音／松浦祐也／一ノ瀬颯／小柳亮太／本山力／野村周平／玉木宏／阿部サダヲ／柴崎楓雅／駿河太郎／松角洋平／音尾琢真

みどころ

黒澤明監督の『七人の侍』（54 年）はチョー有名だし、東映が誇る集団抗争時代劇『十三人の刺客』（10 年）もよく知っているが、『十一人の賊軍』って一体ナニ？本作の製作は、故若松孝二監督に師事し『孤狼の血』（21 年）等のヒット作を連発した白石和彌監督が、わずか 16 頁の笠松和夫プロット（原案）を発見したところからスタート！

1867 年の大政奉還後に起きた北越戦争やそこでの長岡藩の活躍は、『峠　最後のサムライ』（22 年）等でよく知られているが、新発田（しばた）藩とは？新潟湊とは？本作を理解するためには、いくつかの前提条件の理解が不可欠だが、大目的のために囚人を活用する手法は、ウクライナ戦争におけるプーチン大統領のやり方を見ても、それなりの合理性がある。本作では、それと同じような戦いの構図を読み取ることができるので、それに注目！

他方、“黒い水”って一体ナニ？本作後半の刺激性とエンタメ性はそれによるところが大きいので、それに注目！なお、タイトルの是非については、鑑賞後にしっかり考えたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■本作の企画は笠原和夫プロット（原案）の発掘から！■□■

中学時代の私は、3 本立て 55 円の洋画の映画館と 3 本立て 55 円の日活の映画館に通っていたが、小学生の頃には両親に連れられて、東映の時代劇を時々観ていた。日本映画の歴史は、戦後大きく変わったが、東映の時代劇も大川橋蔵、中村錦之助の時代から鶴田浩二、高倉健の任侠ヤクザ路線へ、更に菅原文太、松方弘樹らの実録ヤクザ路線の時代を経て、『十三人の刺客』（10 年）（『シネマ 25』201 頁）を代表とする集団抗争時代劇へと変遷してきた。そんな東映の一時代を支えた主要なメンバーの一人が『日本侠客伝』シリーズ

や『仁義なき戦い』を手掛けた名脚本家の笠原和夫（2002 年没）だ。

他方、若松孝二監督に師事してきた白石和彌監督は、『凶悪』（13 年）（『シネマ 31』195 頁）で第 37 回日本アカデミー賞優秀作品賞&監督賞を受賞した後、『彼女がその名を知らない鳥たち』（17 年）（『シネマ 41』57 頁）、『孤狼の血』（18 年）（『シネマ 42』33 頁）、『止められるか、俺たちを』（18 年）（『シネマ 42』231 頁）、『孤狼の血　LEVEL2』（21 年）（『シネマ 49』154 頁）、『死刑にいたる病』（22 年）（『シネマ 51』163 頁）等を次々と発表してきた。そして、笠原和夫が過去に集団抗争時代劇『十一人の賊軍』の脚本を書いていたことを知り、脚本は残っていなかったものの、16 頁のプロットを読んだところから、「何としても自分が映画化したい」と考える中で、本作の制作がスタートしたらしい。

東映の集団時代劇の面白さは、『十三人の刺客』で実証済みだが、白石監督にとって時代劇は本作が初めて。しかも、『十一人の賊軍』と聞いて、それが何の物語かわかる人は誰もいないはずだ。そもそも、私は『アリババと 40 人の盗賊』は知っているが、寡聞にして『十一人の賊軍』なるものは全く知らなかった。しかし、予告編を観て、それが 1867 年の大政奉還後に起きた、新政府軍 vs 奥羽越列藩同盟による「北越戦争」を時代背景とした壮絶な“血湧き肉踊る集団抗争時代劇”の新たなステージであることを知り、こりゃ必見！役所広司主演の『峠 最後のサムライ』（22 年）（『シネマ 51』154 頁）はオーソドックスな時代劇だったが、同じ時代を背景とした本作の集団時代劇としての面白さはさて如何に？

■□■北越戦争の中、新発田藩の立ち位置は？家老の決断は？■□■

長岡藩家老、河井継之助の獅子奮迅の働きは、『峠　最後のサムライ』で見事に描かれていた。長岡藩は真珠湾攻撃を企画・立案、成功させた連合艦隊司令長官、山本五十六の出身地としても有名だが、あなたは越後国にあった新発田（しばた）藩を知ってる？鳥羽・伏見の戦いを発端とした戊辰戦争は、大政奉還以降も徳川家を支持した長岡藩を中心とする、奥羽越列藩同盟軍が新政府軍を迎え撃つ形で勃発した。そのことはよく知られているが、北越戦争における同盟軍の武器弾薬調達の重要拠点である新潟湊を巡り、一進一退の攻防を繰り広げたことはあまり知られていない。私は新発田藩のことも、新潟湊のことも全く知らなかったし、新発田藩の藩主である溝口直正が幼少だったため、激動の時代下で苦悩し、決断を迫られる責任者となった家老、溝口内匠のことも全く知らなかった。

本作を理解するためには、何よりも戊辰戦争と北越戦争に関する、そんな歴史的知識の学習が不可欠だが、冒頭の説明を聞いただけでは、その理解は難しい。私が本作を鑑賞しながら少しずつ理解したのは、新発田藩の本音は、旧幕府派の奥羽越列藩同盟軍が出兵を求めてきても、何とかそれをやり過ごし（ごまかし）、新政府軍が迫ってくれば、それに帰順することによって、新発田藩の城下を戦火から守りたい（逃れたい）というものだということだ。しかし、そんなうまいこと（ズルいこと）が本当にできるの？しかも、家老の溝口内匠（阿部サダヲ）はそんな考えでも、幼少の藩主・溝口直正（柴崎楓雅）は、奥羽越列藩同盟軍に加わって新政府軍と戦いたいと願っていたから、そんな藩主の下で、溝口

内匠が画策する新政府軍への寝返り策が成功するの？そう思っていると、新発田城には今、奥羽越列藩同盟の色部長門（松角洋平）と斉藤主計（駿河太郎）が「藩主に会って直接意向を確認したい」、と押しかけてきたから、大変だ。さらに、他方では、山縣狂介（玉木宏）率いる新政府軍の城下への到着が迫っていたから、さらに大変だ。同盟軍と、迫りくる新政府軍が鉢合わせしてしまっては、新発田は戦火を免れないから、まさに状況は絶体絶命だ。

■□■家老の一計は砦の護衛作戦。その内容は？要員は？■□■

2022 年 2 月 24 日のロシアによるウクライナ侵攻によって始まったウクライナ戦争は、ロシア vs 欧米諸国との“代理戦争”の様相を見せながら混迷を深めてきた。その上、直近では、北朝鮮の兵士約 1 万人の投入という新たな局面を迎え、問題はさらに深刻化している。そんなウクライナ戦争では、ロシアの囚人たちが多数動員されたが、囚人たちがそれに従ったのは、「ウクライナで戦えば無罪放免にしてやる」というプーチン大統領の言葉に希望を見出したためだ。本作で溝口内匠が編み出した一計は、それと同じく、殺人、賭博、火付け、密航、姦通など、人道を外れて収監された、死罪となるべき 10 人の罪人たちを活用するというものだ。なるほど、なるほど・・・。新政府軍が狙うのは、同盟軍の武器弾薬調達の重要拠点である新潟湊だが、溝口内匠が一計を案じた“砦の護衛作戦”は、そんな新政府軍の作戦を助ける絶妙の策だったが、その内容は？

そんな“砦の護衛作戦”を実行するためには指揮官が不可欠だ。そこで溝口内匠が目をつけたのは、彼の腹心であり、娘・加奈（木竜麻生）の婚約者である入江数馬（野村周平）と、新政府軍と戦わない新発田藩に不満を募らせる直心影流剣術の使い手である鷲尾兵士郎（仲野太賀）の 2 人だ。砦の死守と 10 人の罪人たちのコントロールは大変な仕事だが、この 2 人の武士はどんなスタンスで、囚人たちに臨むのだろうか？

他方、本作冒頭は、山田孝之扮する①駕籠屋の政が、妻を新発田藩士に襲われ復讐したことで罪人とされてしまうストーリーから始まるので、まずはそれに注目。本作導入部は、そんな政のほか、②武士を騙し、大金を巻き上げて投獄された札付きのイカサマ師である赤丹（尾上右近）、③新発田の女郎、夏（鞘師里保）、④坊主でありながら檀家の娘を手籠めにするなど、多くの女犯で死罪を言渡される引導（千原せいじ）、⑤医師の倅で医学を学ぶため、おろしや（ロシア）へ密航を試みて囚われる、おろしや（岡山天音）、⑥貧乏な百姓で、一家心中を試みるも、自分だけ死に損なって罪人となる三途（松浦祐也）、⑦新発田隋一の色男で、侍の女房と恋仲になる禁忌を犯して死罪になった二枚目（一ノ瀬颯）、⑧新発田にある村で、大勢の村人を無差別に殺害した大悪党、辻斬（小柳亮太）、⑨長州出身の剣術家で、新発田で地主への強盗殺人をはたらき罪人となった爺っつぁん（本山力）など、さまざまな悪事を働いたことによって、今にも処刑されそうな罪人たちが次々と紹介されていくので、それに注目。

■□■国境の通行は一本の吊り橋だけ！これを破壊すれば！？■□■

本作がわかりづらいのは、そもそも新発田藩なるものを知らないだけでなく、戦略上の重要拠点とされている新潟湊と新発田藩城下の位置関係がわからない上、家老の溝口内匠が、囚人たちに、国境に一本だけかけられている吊り橋の真後ろに築かせた砦との位置関係もよくわからないためだ。私は、デビット・リーン監督の『戦場にかける橋』（57 年）が大好きだが、本作のシンボルともいえる、この吊り橋をかけるのは大変な作業だったはずだ。新政府軍が新発田城下に攻め入るのを少しでも遅らせるためには、国境にあるそんな吊り橋を破壊してしまうのが最善の策。そんなことは誰でもわかるから、現に 10 人の囚人の中で、ただ一人の知識人たるおろしやが、それを決死隊隊長の入江に主張したが、入江は即座にそれを却下したからアレレ、これは、何か裏がありそうだ。

そんな状況下、今吊り橋の向こう側には新政府軍の先遣隊が、戦争のためではなく話し合いをするために到着！それと全く同じ時期、新発田城下では溝口内匠のじらし作戦に苛立つ色部（松角洋平）と斉藤（駿河太郎）が強行に藩主との面会を迫っていたから、さあ溝口内匠はどうするの？最初は単純に新政府軍が侵入するのを防ぐためと言われて砦の護衛作戦に従事していた 10 人の囚人たちも、次第にその背後に隠された上層部の様々な思惑が見えてくると、様々な疑心暗鬼が広がっていったのは当然だ。他方、根が単純な（？）鷲尾は、砦の護衛作戦に従事する中で、次第に囚人たちとの心の交流を深めていたが、隊長の入江は、「コトが終了すれば囚人たちを口封じせよ」と溝口内匠から命じられていたから、囚人たちへの接し方は明らかに鷲尾とは違うものだった。

そんなこんなの混乱が続く中、城下では策が漏れてしまった溝口内匠の切腹が迫り、砦では新政府軍との小競り合いが次第に本格的戦争に広がっていた。もちろん、新政府軍が本気でにわか仕立ての砦を攻め立てたら、一気に壊滅することは確実。当然そう思えたが、本作が面白いのは花火師の息子で、政を死んだ兄と思い込み、逃がそうとしてお縄にかかったノロ（佐久本宝）が、“黒い水”の活用の仕方を知っていたことだ。ジェームズ・ディーン主演の『ジャイアンツ』（56 年）では、石油を掘り当てるストーリーが面白く描かれていたが、砦の近くに“黒い水”が流れていたことが本作のミソ。これは面白い！さあ、新政府軍は本気で砦に攻め込むの？そしてノロだけが知っている“黒い水”は、ノロが作っていた花火と共に如何に活用されるの？それは、あなた自身の目で、しっかりと。

■□■『七人の侍』はピッタリだが、このタイトルの是非は？■□■

日本で「天下分け目の大合戦」と言われている「関ケ原の戦い」（1600 年）は、徳川家康率いる東軍と、毛利元就を総大将とし、実際は石田三成が率いた西軍が激突したもの。それは例えて言えば、ボクシングの赤コーナーと青コーナーに分かれて戦ったようなものだ。したがって、どちらが勝っても　勝った方が天下人になり、負けた方が滅んでいくことが確実視されていたから、その意味で、まさに天下分け目の大合戦だった。

ところが、徳川第 15 代将軍徳川慶喜が政権を朝廷に返還した、いわゆる 1867 年の大政

奉還後の 1868 年に京都で起きた鳥羽伏見の戦いに端を発した戊辰戦争は、新政府軍たる“官軍（＝薩摩、長州、土佐）”に、旧幕府軍たる“賊軍”が抵抗しただけの構造になっている。すなわち、「勝てば官軍」というのがそれまでの戦いの常識だったが、戊辰戦争や北越戦争は、最初から新幕府軍＝官軍、旧幕府軍＝賊軍と決まっていたから、旧幕府軍＝賊軍に歩が悪いのは当然だった。薩長同盟の最大の功労者は、坂本龍馬だが、薩摩・長州を中心とする軍隊に、“錦の御旗”を掲げさせ、これを“官軍”と称する策を立案したのは、三条実美や西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允たちだが、そんな戦いの構図を見事に演出した時点で、すでに官軍の勝利と賊軍の敗北は決まっていたわけだ。したがって、そんな状況を正確に把握していた旧幕臣の勝海舟が、江戸に攻め上ってくる西郷隆盛率いる官軍との間で、“無血開城”の合意をとりつけた功績は、極めて大きいものがある。逆に敢然と政府軍に立ち向かった長岡藩の悲劇は、『峠　最後のサムライ』（22 年）で見たとおりだ。

他方、黒澤明監督の『七人の侍』（54 年）では、七人の侍たちのキャラや役割が、一人一人明確になっていた上、そんな大活劇を見せた「七人の侍＝武士」も、結局ははかない存在で、真の勝者は農民であるという主題が、アピールされていた。それに比べると、本作のタイトル『十一人の賊軍』は、何かヘン。だって、本作は、溝口内匠に命じられて決死隊に加わった鷲尾が、最後の最後に「俺は 11 人目の賊軍だ」と大声でわめきながら、侍の意地を通すところがミソだが、政を代表とする「十人の罪人」たちは、ホントに賊軍と言えるほどの存在だったの？それが私には疑問だからだ。『十三人の刺客』はメチャ面白い集団抗争時代劇だったし、本作もその系譜を受け継いだ、一大エンタメ集団抗争時代劇であることは認めつつ、その実態が「十人の罪人と一人の賊軍」の物語である本作を、「十一人の賊軍」とタイトルしたのは、如何なもの？

2024（令和 6）年 11 月 7 日記